Miyazaki Women's Junior College

主要な参考文献

金葉和歌集総索引	本文　索引	清文堂
後拾遺和歌集総索引	本文・校異・索引・研究	清文堂
金葉和歌集　詞花和歌集	新日本古典文学大系	岩波書店
後拾遺和歌集	新日本古典文学大系	岩波書店
古今和歌集	新日本古典文学大系	岩波書店
千載和歌集	新日本古典文学大系	岩波書店
後撰和歌集	新日本古典文学大系	岩波書店
萬葉集一二三四	日本古典文学大系	岩波書店
萬葉集一二三四	日本古典文学大系	小学館
古今著聞集	日本古典文学大系	岩波書店
古語大辞典	中田祝夫編監修	小学館
礼記上中下	新釈古典大系	明治書院
和漢朗詠集　梁塵秘抄	日本漢文文学大系	岩波書店
栄華物語下	日本古典文学大系	岩波書店
古今著聞集	日本古典文学大系	岩波書店
沙石集	日本古典文学大系	岩波書店
和泉式部日記　紫式部日記	日本古典文学大系	小学館
更級日記　讃岐典侍日記		
全講枕草子	池田亀鑑	至文堂
拾遺和歌集	新日本古典文学大系	岩波書店
続國歌大観歌集	松下大三郎編纂	角川書店

（平成六年十二月十日受理）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

源重之、少将藤原義孝、清少納言、貴舟の明神である。

○部立は、春（二首）、夏、秋、別、雑（八首）、神祇であり、「雑」が八首もある。

○作者が禁止している対象は、「春」「さくら花」「ほととぎす」「こがらしの風」「秋の月」「月」「中納言定頼」「去って行く男」「人」「出羽弁」「舟人」「法師」「和泉式部」「清少納言と親密な人」等であり、人事に関するものが『金葉和歌集』に比べて多い。

○『金葉和歌集』の場合、「な…そ」の上に形容詞「いたし」の連用形「いたく」を置いて作者の心情を強く表す用例が一例あったが、『後撰和歌集』の場合、「またき」が二例、「いたく」が二例、「たかく」が一例ある。いずれも作者の強い心情表現になる。

○「な…そ」を含む文節を見ると、複合動詞の間に「な」がはいるもの三例、「な」と「そ」の間にカ変・サ変の未然形がはいる用例はない。

2「終止形・な（終助詞）」　一〇例

用例一・二・三・四・五・七・八・九・一〇

○懇願の気持を含めて禁止すると解されるもの

用例一・四・五・六・七・八　六例

この用例は、作者がなんらかの苦悩のために、また、作者に関係のある動作が予定されているために、かかわりのあるものに対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む場合に用いられることが多い。

○禁止の意を表すと解されるもの

用例二・三・九・一〇　四例

○作者は、弁めのと、馬内侍、大中臣能宣朝臣、和泉式部、道命法師、源為善朝臣、清少納言、藤原長能、藤原実方朝臣、中務卿具平親王である。男性が多い。

○部立は、春（二首）、秋（一首）、恋（一首）、雑（六首）であり、「な…そ」と同じ「雑」の歌が多い。

○作者が禁止している対象は、「梅の花」「帰る雁」「菊の花」「夢の中の人」「人」「昔馴染みの女房」「清少納言と親密な人」「共に花を尋ねる人」「為頼・長能」「神」であり、自然・人事にかかわる多くの事象を対象にしている。

注

1　『後拾遺和歌集』　新日本古典文学大系　岩波書店

一一〇二　脚注

おわりに

『金葉和歌集』の「な…そ」一一例、「…な」一二例、うち詞書が一列ずつ、『後拾遺和歌集』の「な…そ」一四例、「…な」一〇例、うち詞書が一例ずつ、四七例を検討した。『古今和歌集』『新古今和歌集』の時と同じく「な…そ」「…な」のいずれにも「禁止の意味をあらわすもの」「懇願の気持を含めて禁止するもの」が見られる。また、作者の禁止している対象、懇願の気持を含めて禁止している対象も自然・人事の多岐にわたる。

さらに作者が心情的になんらかの苦境にある場合、作者になんらかの関係のある動作が予定されている場合、作者に密接な関係がある上に、事象の展開がはっきり予想できる場合、懇願の気持を含めて禁止している用例が数多くみられる。八代集の「な…そ」「…な」を次回でまとめるつもりである。

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

れはしるらんとあるはいかゝすへきといひをこせて侍ける返事にめをつゝみてつかはしたりければ則光心もえていかにせよとあるそとまうてきて侍ければよめる　かつきするあまのありかをそこなりとゆめいふなとやめをくはせん　清少納言」

歌意は、水に潜る海士のように人に知らせない私の住みかを決して言ってくださるなというつもりで若布を送ったのでしょう。「な」は懇願の気持を含めて禁止している。

なお、『枕草子』八〇段に「さてのち来て、『一夜は、せめたてられて、すずろなる所々になん率てありき奉りし。まめやかにさいなむに、いとからし。さて、などともかくも御返りはなくて、すずろなる布の端をばつつみて賜へりしぞ。あやしのつつみ物や。人のもとに、さるものつつみておくるやうやはある。とりたがへたるか』といふ。いささか心も得ざりけると見るがにくければ、物もいはで硯にある紙の端に、〈かづきするあまのすみかをそことだにゆめいふなとやめを食はせん〉と書きてさし出でたれば、『歌よませ給へるか。さらに見侍らじ』とて、あふぎ返して逃げて往ぬ。」とある。この後、清少納言は、歌を詠むことをきらう則光と絶交することになる。

用例八　一一六七「今よりはあらふる心ましますな花のみやこにやしろためつ　此歌は或人云世中さはかしう侍けれは舟をかの北にいま宮といふ神をいはひておほやけも神馬奉り給となんいひつたへたる」

「いまよりは荒ぶる心ましますな」の語句から神をなごめる歌と言える。この歌の前に神に祈願する歌、後に神に願いを訴える歌がある。作者が自分より強大な力をもつものに呼びかける場合、懇願を含めた禁止の「な」になる。「花のみやこ」は京の都をほめて言う言葉。「舟岡」は山城国の歌枕。「いま宮といふ神」は、現、京都市北区にある今宮神社。

用例九　一二〇三「またしらぬ花もやあると尋みんあなかましはし風にしらすな　藤原実方朝臣」

歌意は、まだ知らない花があるかもしれないと尋ね歩いてみよう。ああ、静かに、しばらく風に花のありかを知らせるな。「な」は禁止の意をあらわす。

用例一〇　八九二「春の比為頼長能なとあひともに歌よみ侍りけるに、けふことをはわするなといひわたりて後、為頼朝臣身まかりて又のとしの春長能かもとにつかはしける　いかなれや花の匂ひもかはらぬを過ぎにし春の恋しかるらん　中務卿具平親王」

春に歌を詠み、今日の風雅を「忘れるな」と共に言い続けた後、仲間の一人が欠け、翌年、残った仲間同士が哀惜した歌である。終助詞「な」は禁止をあらわす。

まとめ

1「な（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

○懇願の気持を含めて禁止すると解されるもの　一一例

用例二・三・四・五・六・七・九・一〇・一一・一三・一四

この用例は、作者になんらかの関係のある動作が予定されている場合、また、作者に密接な事象の展開がはっきり予想できてさらに、心情的に懇願する必要のある場合に用いられることが多い。

○禁止の意を表すると解されるもの　三例

用例一・八・一二

○作者は、源師賢朝臣、大中臣能宣朝臣、元恵法師、大宮越前、源光成、藤原範永朝臣、馬内侍、藤原綋理、大弐三位、源相方朝臣、

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

にかたるな　馬内侍」

「六九　ゆきかへる旅に年ふるかりがねはいくその春をよそに見るらん」に続く歌で、花の盛りに帰る雁を詠んだもの。歌意は、美しい花の季節に花を見捨てて帰って行く無風流な心は見破られるだろう。帰る雁よ、花の盛りのさまを人に語ってはならない。「な」は禁止の意をあらわす。

用例三　三五四「屏風絵に菊花さきたる家にたかすへたる人のやとる所をよめる　かりにこむ人におらるなきくの花うつろひはてん末までもみん　大中臣能宣朝臣」

詞書から屏風絵の画中の菊に「折らるな」と呼びかけた歌。「たかすへたる人」は、鷹を手にとまらせている人。「かりにこむ」の「かり」は「狩り」と「借り」の掛詞。歌意は、菊の花よ、菊の花がすっかり色変りするまで見たいと思うから、鷹狩りに宿を借りに来た人に手折られるな。「な」は禁止の意を表す終助詞。

用例四　六一一「おとこのはしめて人のもとにつかはしけるにかはりてよめる　おほめくなたれともなくてよひ〳〵に夢にみえけん我そその人　和泉式部」

「夢」は恋の歌で好んで詠まれるものの一つである。自分はあなたの夢に見えた者だと言って男の心で相手に迫る歌。「おぼめく」は「しらばくれる」「そらとぼける」こと。『和泉式部日記』敦道親王の歌に「たづね行くあふさか山のかひもなくおぼめくばかり忘るべしやは」がある。「よひに夢にみえけん」とほぼ同趣の歌が『古今集』に「夜ゐに枕さだめむ方もなしいかに寝し夜かゆめに見えけむ」（巻第十一・恋歌一読人しらず）。歌意は、そらとぼけないでください。誰とはっきりわからないままに宵ごとあなたの夢に現れた人がいるでしょう。私がその人です。この「な」は懇願の気持を含めて禁止する終助詞である。

用例五　八八六「くま野へまいるとて人のもとにいひつかはしける　わするなよわするときかはみくまのゝ浦のはまゆふ恨かさねん　道命法師」

「わする」という語を重ね、さらに「浦」「恨」（うらみ）と同音を重ねて別れがたい心情を巧みに詠んでいる。「くま野」は修験道の山伏達が修行の場とした熊野権現。「みくまのゝ浦」は紀伊国の歌枕。『拾遺集』恋一・柿本人麿の歌に「み熊野の浦の浜木綿百重なる心は思へどただに逢はぬかも」がある。歌意は、私のことを忘れないでください。もしも忘れたと聞いたならばあの百重にも重なる熊野の浦の浜木綿のように幾重にも恨みます。この「な」も懇願の気持を含めて禁止している。

用例六　一一〇三「後冷泉院御子宮と申ける時うへのおとこも一品の宮の女房ともろともに桜の花を見てあそひけるに古中宮の出羽も侍ときゝてつかはしける　花さかり春のみ山の曙におもひ忘るな秋の夕くれ　源為善朝臣」

「春」と「秋」を対比させて多くの気持を詠んでいる。歌意は、花盛りの春のみ山（春宮）のあけぼのに心を奪われて、秋の夕暮れのさびしさ（注一）（なき中宮）を忘れてしまわないでください。「春のみ山の曙」は東宮を歌語で「春のみ山」ということから、一品宮が東宮妃として幸福な生活を送っていること。「秋の夕くれ」は、中宮を秋の宮ということから、中宮威子がなくなった秋の悲しみ。なくなったのは、九月六日だから実際にも秋だった。

用例七　一一五六「陸奥守則光蔵人にて侍ける時いもせなといひつけてかたらひ侍けるに里へ出たらんほとに人々の尋んにありかなつけそといひて里へまかりいてゝ侍けるを人々のせめてせうとな

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

『古今著聞集』巻第五　一七四、『沙石集』巻第五末（一一）などに見える。

一一六四「おとこにわすられて侍りけるころきふねにまいりてみたらしかはにほたるのとひ侍けるを見てよめる　もの思へはさはのほたるをわかみよりあくかれいつる玉かとそみる　和泉式部」の「御かへし」。一一六四の歌は、思い悩んでいますと、きふねの明神に訴えた歌。これに対して一一六五の歌は、奥山に激しい勢いで落ちる滝つ瀬の水玉のように魂が散るほど思いつめるなよと「男の声」で、きふね明神の「御かへし」があった。「な…そ」は禁止の意である。

用例一三　一二一四「七月はかり月のあかゝりけるよ女のもとにつかはしける　わすれてもあるへきものを此ころの月よゝいたく人なすかせそ　少将藤原義孝」

詞書から女に求愛する男の歌。類歌に『古今和歌集』恋四・よみ人しらずに「月夜よし夜よしと人に告げやらば来てふにはたり待たずしもあらず」、『万葉集』巻六　一〇一一に「我屋戸之梅咲有跡告遣者来云似有散去十方吉」がある。歌意は「この頃の月夜よ、私の気をはなはだしくそそらないでくれ。あなたのことを忘れていたらよかったのに」「な…そ」は懇願の気持を含めて禁止している。

用例一四　一一五六「陸奥守則光蔵人にて侍ける時いもせなといひつけてかたらひ侍けるに里へ出たらんほとに人々の尋んにありかなつけそといひて里へまかりいてゝ侍けるを人々のせめてせうとなれはしるらんとあるはいかゝすへきといひをこせて侍ける返事にめをつゝみてつかはしたりければ則光心もえていかにせよとあるそとまうてきて侍けれはよめる　かつきするあまのありかをそこなりとゆめいふなとやめをくはせん　清少納言」

詞書の中に「な…そ」が使用されている。懇願の気持を含めて禁止の意をあらわす。なお『枕草子』八〇段に「里にまかでたるに、殿上人などの来るをも、やすからずぞ人々はいひなすなる。いと有心に、ひき入りたるおぼえはたなければ、さいはむもにくかるまじ。また、昼も夜も来る人を、なにしにかは、なし、ともかがやき帰さむ。まことにむつまじうなどあらぬも、さこそは来めれ。あまりうるさくもあれば、この度出でたるところをばいづくとなべてには知らせず。左中将経房の君、済政の君などばかりぞ、知り給へる。（中略）『さらになきこえ給ひそ』などいひて日ごろ久しうなりぬ。」とある。

二

「終止形・な（終助詞）」

歌　九例

詞書　一例

用例一　六一「太皇大后宮東三条にてきさきにたゝせ給けるに家の紅梅をうつしうへられて侍ける花のさかりにしのひてまかりていとおもしろく咲たる枝にむひつけ侍ける　かはかりの匂ひなりとも梅花しつかかきねをおもひわするな　弁めのと」

この詞書を読むと、『大鏡』昔物語の嵯峨梅の歌「勅なればいともかしこしうぐひすの宿はととはゞいかゞ答へむ」思いだす。「移し植へられて」は、弁乳母の家から東三条殿へ移植されたこと。「花のさかりにしのひて」は、満開の時にこっそり出かけての意。「梅の花よ、身分の低いわが家の垣根を忘れないでくれ。「な」は懇願の気持を含めた禁止の終助詞である。

用例二　七〇「とゝまらぬ心そみえんかへるかり花のさかりを人

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

に入らむとするを見てよみ侍ける　ながむれば月かたぶきぬあはれわがこの世のほどもかばかりぞかし　僧正深覚」「八六八　月を見てよみ侍ける　もろともにおなじうき世にすむ月のうらやましくも西へゆくかな　中原長国妻」

「な…そ」は懇願の気持を含んで禁止している。

用例七　九二四「わすれしといひ侍りける人のかれ〳〵になりてまくらはことりにをこせ侍りけるに　玉くしけ身はよそ〳〵に成ぬともふたり契しことなわすれそ　馬内侍」

詞書から夫婦関係の破局がわかる。歌意は去って行く男に対して女は「ちぎりしこと」は「な忘れそ」と訴える。「玉くしけ」は詞書から枕箱。「身」の縁語で「蓋」を掛ける。「よそよそに」は離れ離れにの意。

用例八　一〇三三「三条院東宮と申けるとき法師にまかり成て宮のうちにたてまつり侍ける　きみに人なれなならひそおく山に入ての後はわひしかりけり　藤原縁理」

旧主である三条院東宮のもとから去った法師の歌。「宮のうちにたてまつり」と詞書にあるから直接東宮にさしあげなかったことがわかる。歌意は、「世の人よ、私の仕えていた君に馴れ申しあげるな。お仕えしていた私が奥山に入った後はわびしいことであることだ。」「な…そ」は禁止の意をあらわす。

用例九　一一〇一「二条院東宮にまいり給て藤つほにおはしましけるに前中宮のこの藤坪におはせしことなと思ひ出る人なと侍けれは　忍ひねの涙なかけそかく計せはしとおもふころの袂に　大弐三位」

『栄花物語』巻第三十四「暮まつほし」に見える。歌意は、こんなにも涙が流れて狭い袂では拭いきれぬと思っている頃に忍び泣く涙をかけてくださいますな。東宮の乳母として、おめでたい折に涙を見せないでほしいと心情を吐露した。この「返し」が「一一〇一　春の日に帰らざりせばいにしへのたもとながらや朽ちはてなましに出羽弁」である。この「な…そ」は懇願の気持を含めた禁止である。

用例一〇　一一〇七「六条左大臣身まかりて後播磨国にくたり侍けるに高砂のほとにてこゝはたかさことなんいふと舟人いひ侍けれは昔を思ひいつることやありけんよみ侍ける　高砂とたかくないひそ昔きゝしおのへのしらへまつそ恋しき　源相方朝臣」

「高砂」は播磨の国の歌枕。「おのへ」に「尾上の松」の「尾上」と琵琶の「緒」を掛ける。「まつ」に「先」と「松」を掛ける。歌意は、高砂と声高に言わないでくれ。昔耳にした尾上の松風に通うなき父の琵琶の調べがなにより恋しくて、松風を聞きたいから。地名を聞いて今はなき生前の父をしのぶことになった。「な…そ」は懇願の気持を含めて禁止している。

用例一一　一一五三「法師の色このみけるをよみ侍ける　常ならぬ山のさくらに心いりて池の蓮をいひなはなちそ　源重之」

詞書から好色な僧侶をたしなめた歌と思われる。巧みな比喩が句中に見られる。「山のさくら」は「女色」、「池の蓮」は「西方浄土に咲く蓮」。歌意は、はかなく移り変わる山の桜に熱中して西方浄土に咲く蓮のことを思い切って言わないでほしい。「な…そ」は懇願の気持を含めて禁止している。

用例一二　一一六五「御かへし　おくにたきりておつる滝つせの玉ちるはかり物な思ひそ　この歌きふねの明神の御かへしなりおとこのこゑにて和泉式部かみゝにきこえけるとなんいひつたへける」

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

る歌が前後に見られる。「二　出でて見よ霞も立ちぬらん春はこれより過ぐとこそ聞け　光朝法師母」「四　逢坂の関をや春も越えつらん音羽の山の今日はかすめる　橘俊綱朝臣」「五　春の来る道のしるべはみ吉野の山にたなびく霞なりけり　大中臣能宣朝臣」「六　人知れず入りぬと思ひしかひもなく年も山路を越ゆるなりけり」

用例二　一三四「さくら花またきなちりそ何により春をは人のおしむ成らん　大中臣能宣／朝臣」

春を惜しむ心情を詠んだ歌。桜の花よ、早くも散らないでくれ。何によって人は春を惜しむというのか、桜の花以外のもので惜しむということはないのに、の意。この「な…そ」は懇願の気持を含めて禁止している。一三四の次に散る歌を惜しむ歌として「一三五　山里に散りはてぬべき花ゆへに誰とはなくて人ぞ待たるる」「一三六　しめゆひしそのかみならば桜花をしまれつゝ今日は散らまし」「一三七　桜花道みえぬまで散りにけりいかゞすべき志賀の山越え」等がある。

用例三　一七八「つくしの大山寺といふ所にて歌合し侍けるによめる　我ガやとのかきねなすきそほとゝきすいつれの里もおなしうの花　元恵法師　大山別当対島守　藤茂規男」

この歌の前後に「一七六　卯の花の咲けるさかりは白波のたつたの川のゐせきとぞ見る」「一七九　ほとゝぎす我は待たでぞ心みる思ふことのみたがふ身なれば」等、「卯の花」と「ほととぎす」を詠んだものが多い。歌意は、ほととぎすよ、わが家の垣根のもとを素通りしないでくれ、どこの里でも見よとばかりに同じ卯の花が咲いているのだから。この「な…そ」も懇願の気持を含めて禁止している。

用例四　三四〇「山家秋風といふこゝろをよめる　山里のしつの松かきひまを荒みいたくな吹そこからしの風　大宮／越前」

歌意は、山里の身分の卑しい者の住む松の垣根は隙間が荒いので寒々とした木枯らしの風よ、ひどく吹かないでくれ。三三九に「月はよしはげしき風の音さへぞ身にしむばかり秋はかなしき」と「こがらしの風」を「はげしき風」と詠み秋風の風情を述べている。『曾丹集』に「山里に葛はひかかる松がきの隙なく秋は物ぞ悲しき」、『和泉式部集』に「まつ垣にはひくる葛をとふ人は見るに悲しき秋の山里」と悲秋を詠んでいる。この「な…そ」も懇願の気持を含めて禁止している。

用例五　四八七「かへし　たゝぬよりしほりもあへぬ衣手にまたきなかけそまつかうらなみ　源光成」

四八七は、「四八六　讃岐へまかりける人につかはしける　松山の松の浦風吹きよせば拾ひてしのべ恋わすれ貝　中納言定頼」の「かへし」で、「松の浦」をよみこんだ贈答である。「まつかうらなみ」に「待つ」「裏（衣）」をそれぞれ掛けている。歌意は、まだ都を出発しないうちからしぼりきることに堪えられない涙の袖に、早くも「待つ」などと、松の浦波をかけて濡らさないでください。「な…そ」は、懇願の気持を禁止している。

用例六　八六八「侍従のあまひろさはにこもるときゝてつかはしける　山のはにかくれなはてそ秋の月このよをたにもやみにまとはし　藤原範／永朝臣」

「秋の月」は詞書から「侍従のあま」をたとえる。「このよ」の「よ」は「夜」と「世」の掛詞。「やみ」は「月」の縁語。歌意は、秋の月よ、山の端にすっかり隠れてしまわないでくれ。せめてこの夜（世）だけでも闇にさまようまいと思うので。現世とのかかわりで「月」を詠んだ歌が八六七の前後にある。「八六六　月の山の端

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

○作者が禁止している対象は、「はるの山風」「井での河浪」「秋のはつ風」「秋夜の月」「山吹の花」「みねのしらくも」「人」「意中の人」「筏士」「をばなりける人」「仏」等であり、自然・人事の多岐にわたる。

○用例二は、「な…そ」の上に形容詞「いたし」の連用形を置いて、作者の心情を強く表現している。

○「な…そ」を含む文節を見ると、複合動詞の間に「な」がはいるもの五例、「な」と「そ」の間にカ変の未然形、サ変の未然形が一例ずつ、残りは連用形をはさんでいる。

2「終止形・な（終助詞）」　一一例

用例二・三・四・五・六・七・八・九

一〇・一一・一二（詞書）

「連体形・な（終助詞）」　一例

用例一

○懇願の気持を含めて禁止すると解されるもの

用例四・五・六・七・一一　五例

この用例は、作者が心情的になんらかの苦悩があるために、他に対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望む状況下で用いられている。

○禁止の意を表すと解されるもの　七例

用例一・二・三・八・九・一〇・一二（詞書）

○作者を見ると、経信卿母、春宮大夫公実、菅野為言、権中納言国信、権中納言通俊、田口重如、摂政左大臣、律師慶、源俊頼朝臣（二首）、源信宗朝臣、読人不知である。

○部立は、春（一首）、夏（二首）、秋（二首）、別（二首）、恋（一首、詞書）雑（二首、連歌一首）であり、「な…そ」より幅がある。

○作者が禁止している対象は、「桃の花」、「牽牛星」、「女郎花」、「風」、「時鳥」、「意中の人」（四首）、「小野の里人」、「弥陀」、「源信宗朝臣」であり、「な…そ」と同じ自然・人事の多岐にわたる。

注

1 用例は、増田繁夫・居安稔恵・柴先陽子・寺内純子編『金葉和歌集総索引 本文・索引』（清文堂）による。

2 『金葉和歌集　詞花和歌集』　新日本古典文学大系　岩波書店　脚注

3 『風土記』　日本古典文学大系　岩波書店

4 『後拾遺和歌集』　新日本古典文学大系　岩波書店

5 『金葉和歌集　詞花和歌集』　新日本古典文学大系　岩波書店　七一

○ 脚注

6 『金葉和歌集　詞花和歌集』　新日本古典文学大系　岩波書店　三四

八 脚注

『後拾遺和歌集』の禁止表現

「な（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

歌　一三例

詞書　一例

用例一　三「春従東来といふ心をよみ侍ける　あつまちはなこそのせきもあるものをいかてか春のこえてきつらん　源師賢朝臣」

この歌は、東海道には「来るな」という名の勿来の関もあるのにどのようにして春は都まで越えてきたのだろうか、の意。「な」は禁止の意をあらわす。

『礼記』月令第六に「迎春於東郊」、『和漢朗詠集』巻上「梅」に「誰言春色従東到露暖南枝花始開」とある。「春の来る道のりに関す

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

歌。気をゆるめることなく心にかけている阿弥陀仏よ、西方浄土に導く念仏往生願をたがえないでくれ、の意。「ひとやりならぬちかひたがふな」に極楽往生への強い願望が感じられる。

用例八　七三四「女郎花をよめる　をみなへしよのまの風にをれふしてけさしら露に心おかるな　摂政左大臣」

女郎花よ、夜のうちに花を散らす風に折れ伏して、今朝露が置くのに気がねするなよ、の意。異性にたいして気のあることを詠んだと思われる。この歌の直前に、「露」「心おく」を詠んだ歌、「二三二　白露や心をくらんをみなへし色めく野辺に人かよふとて」がある。

用例九　八五七「蓑むしのむめのはな咲きたる枝にあるを見て

むめの花がさきたるみのむし　まへなるわらはのつけける　雨よりは風ふくなとやおもふらん　律師慶新暹」

連歌である。「むめの花がさ」は、梅花の直喩。歌意は、梅の花を笠として身につけている蓑虫よ、雨よりも梅の花を散らせる風は吹くなと思っているのだろうか。

用例一〇　九九四「時鳥驚夢ヲ」といへることをよめる　またずてふ我名はたてじ時鳥なきおこしつと人にかたるな　源俊頼朝臣」

時鳥が鋭い鳴き声で眠りをさましたことを喜ぶ趣向の歌である。類似の趣向の歌が『金葉和歌集』巻第二に「郭公驚夢といへることをよめる　おどろかす声なかりせば時鳥まだうつゝには聞かずぞあらまし　中納言実行」とある。『散木奇歌集』には「郭公またずてふ我が名はたてじ郭公鳴きおこしつと人にかたるな」とある。

用例一一　一〇〇九「九月十三夜のこころを　百首歌中に、別心を

わするなよかへるやまぢにあとたえてひかずはゆきのふりつもるとも　俊頼朝臣」

あの月の美しい十三夜のことに思いを馳せて、私のことを忘れないでください。山路に雪は降り積もっても。

用例一二　四七六「周防内侍したしくなりてのち、ゆめ〳〵この事もらすなと申ければ　あはぬ夜はまどろむことのあらばこそ夢にもみきと人にかたらめ　源信宗朝臣」

歌意は、逢っていない夜、うとうとするようなことがあるならば、夢の中であなたにあったと人に話しましょう。恋慕う人のことを思って口外することをきつく制止する詞書の中に禁止の「…な」がある。

まとめ

1「な（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

○懇願の気持を含めて禁止すると解されるもの　八例

用例一・二・三・四・七・八・九・一〇

これらの用例は、作者に密接な関係のある事象の展開がはっきり予想できる場合、また、作者になんらかの関係のある動作が　予定されている場合に、制止の意を含みつつ懇ろに願い望む状況下で用いられている

○禁止の意を表すと解されるもの　三例

用例五・六・一一（一一は詞書）

○作者を見ると、読人不知は一首（詞書）、平兼盛（一首）、摂政左大臣（一首）、太宰大弐長実（三首）、大納言経信（一首）、源師賢朝臣（一首）、中納言雅定（一首）、源俊頼朝臣（二首）である。

○部立について見ると、春（三首）、秋（三首）、雑（二首）、補遺歌（二首）。（詞書一首）

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

のいろをうばひてさけるうのはなにをのゝさと人ふゆごもりすな　春宮大夫公実」

一面に咲きそろった卯の花は、雪の白さと見間違えてしまうほど美しい。この歌は、雪の白さを奪って咲いているかと思われるほど美しく咲いている卯の花を見て、冬ごもりをするなよと、小野の里人に呼びかけたものである。『後拾遺和歌集』に「卯花をよみ侍りける　雪とのみあやまたれつゝ卯の花に冬ごもれりと見ゆる山里　源道済」があり、類似の趣向が見られる。また『万葉集』に「由吉能伊呂遠有婆比弖佐家流有米能波奈伊麻佐加利奈利弥牟必登母我聞」（巻第五　八五〇）があり、この場合、雪の色よりも美しく咲いた梅の花を詠んでいる。同じ卯の花を詠んだ歌が同集巻第二夏部に「ゆきとしもまがひもはてじうのはなはくるれば月のかげかともみゆ　江侍従」がある。

用例三　一六〇「宇治へまかりけるに、みちにたごの水ひきけるを見て、かくなんと申ければ、入道前太政大臣みにまかりたりけるに、水もみえざりければ、いかにとたづねけるに、七月七日にあたりたりければよめる　ひく水もけふたなばたにかしてけりあまの河瀬にふなひすなとて　菅野為言」

宇治に出かけた時に田へ引く水が見えなかった。この日が折しも七月七日の七夕にあたっていた。そこで、七夕にことよせて詠んだ歌である。引く水も七月七日のたなばたにかしてしまった。牽牛がさおさして織女のもとに渡る天の川の河瀬に「船居すなとて」。藤原為言は「ひく水もけふ七夕にかしてけり天の川原にふなゐすると て」と詠んでいる。「ふなゐするとて」だと歌意の通りがよい。

用例四　三五五「百首歌中に、わかれのこゝろを　けふはさはたちわかるともたよりあらばありやなしやのなさけわするな　権中納言国信」

この歌は「わかれのこころ」を詠んだ歌。『伊勢物語』第九段の「名にし負はばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」を想起させる歌である。今日こうして別れるにしても、もし伝があったら、私が無事に生きているかどうかを尋ねてくれる「なさけ」は忘れないでほしい、の意。この「な」は、懇願の気持を含めて禁止する終助詞ととると「わかれの情愛」が深まる。

用例五　三五九「経平大弐にてくだる時、ぐしてまかりける日、公実のもとへつかはしける　さしのぼるあさ日にきみをおもひいでんかたぶく月にわれをわするな　権中納言通俊」

「あさ日」と「月」との対比が方角とともに君と我を暗示している。[注6] 三五五「けふはさは」と同じ「わかれのこころ」を詠んだ歌。東に昇る朝日を目にしたらあなたを思い出しましょう。あなたは西に沈む月を見ては私を思い出し、忘れないでください、の意。この「な」も懇願の気持を含めて禁止する終助詞ととらえると対比による暗示の趣が深まる。

用例六　四四四「題読人不知　あふことはゆめばかりにてやみにしをさこそみしかと人にかたるな」

この歌は、逢うことは夢ぐらいにとりとめもなく終ってしまったけれども、逢ったなどと人に語らないでください、の意。現実のはかない逢瀬を詠んだ恋の歌と思われる。結句で、現実は夢とは程遠い恋のため、懇願の気持をこめて人に語ることを禁止している。

用例七　六三七「つゐにおちいりにける程によめる　たゆみなくこゝろをかくる弥陀ぼとけひとやりならぬちかひたがふな　田口重如」

詞書「つゐにおちいりにける程」から息絶える時の思いを詠んだ

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

ことぐさを関の名ぞとも思ひける哉　源俊頼朝臣」

この歌は、「来ないでください」ということばをあなたは言い癖にしているが、私はそれをただ関の名だとばかり思っていたよ、の意。「な…そ」にはこの歌のように、登場する人物になんらかの動作が予定されているために他に対して制止の意を含みつつ懇ろに願い望むことが多い。「な…そ」は懇願の気持を含めた禁止表現。「なこそ」は「な来そ」と「勿来（関）」の懸詞であり、よく用いられる。

用例九　八五二「ごくらくをおもふといへる事を　よものうみのなみにたゞよふみくづをもなゝへのあみに引なもらしそ　源俊頼朝臣」

「極楽を思ふ」から仏の慈悲を願った歌と思われる。この歌は、四方の海の波に漂う水屑のような私をも、仏の七重の網に引き洩らさないでくださいの意。この歌の前に「竜女成仏をよめる　わたつ海のもくづと見し物をいかでか空の月と成らん　勝超法師」があり、わが身をとるにたらぬものと見なして「もくづ」と詠んでいる。成仏し、極楽浄土に往生することを願った歌と思われる。「な…そ」は懇願の気持を含めた禁止表現。「引」は「あみ」の縁語。「あみ」は「網」と「阿弥」の懸詞で、仏の慈悲を象徴している。[注5]

用例一〇　八八八「遠山ニ見レル花ヲといへる事をよめる　人しれずこゝろをやりて見るはなはたちなへだてそみねのしらくも　太宰大弐長実」

歌意は、山の峰の白雲よ、間をふせいで遮らないでくれ。私は遠くの山にある桜の花を見てひそかに心を慰めているのだ。「はな」は、山桜の花と思われる。八九〇に「くらまの大門のはなさかりなりときゝて、くだりてよめるやまざくら霞のこめつればふもとの花ををりてこそ見れ」、八八九に「行ク路ノ花といへる事をよめる　さくら花みるにころはつきながらいかにすぎうきやまぢなるらん」がある。「な…そ」には、この歌のように、作者に密接な関係がある上に、事象の展開がはっきり予想できて、さらに心情的に懇願する場合がある。「な…そ」は懇願の気持を含めた禁止表現である。

用例一一　五五六「甲斐ノ国よりのぼりて、をばなりける人の許にありけるが、はかなき事によりてなありそと　とりのこのまだかひながらあらませばおばといふものはおいゝでざらまし　読人不知」

詞書に「な…そ」が用いられている。甲斐の国からおばのところにやって来て過すうちにちょっとした事で「いるな」と言われて追いだされた歌の詞書。この用例のように威圧的な状況で展開する場合の「な…そ」は強い語調の禁止表現になる。

二

「終止形・な（終助詞）」

歌　一一例

詞書　一例

用例一　七四「三月三日、桃花をみてよめる　やまがつのそのふにたてるもゝのはなすけるなこれをうへてみけるも　経信卿母」

三月三日は上巳の節句である。桃の節句に「やまがつ」の住む家の庭に桃の花が美しく立っている。それを見て「すけるな」と好色のことを詠んだ歌。『後拾遺和歌集』に「隣より三月三日に、人の桃の花を乞ひたるに桃の花宿に立てればあるじさへすける物とや人の見るらむ　大江嘉言」（巻第二十　雑六　一二〇二）がある。桃の木を植えているが好色ではないことを詠んだ歌である。

用例二　一〇三「鳥羽ノ殿にて、人　卯ノ花の歌よみけるに　ゆき

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

日時に限りがあって散ることでさえ惜しい山吹の花をひどく折りとってくれるな、と「井での河浪」に呼びかけることによって、命の短い山吹の花への心情を詠んでいる。「をり」を「河浪が山吹を折る」意と「河浪が重なる」意の懸詞としてとらえると「井での河浪」の山吹の花を折る情景がさらに広がり、すぐれた叙景歌である。体言止めによる詠嘆表現は効果的である。「な…そ」は懇願の気持を含めて禁止している。

用例　三　一五〇　「野草帯露といへることをよめる　まくずはふあだのおほのゝしらつゆをふきなみだりそ秋のはつ風　太宰大弐長実」

露をおびた野草の秋の風情を詠んでいる。葛の生えている阿陀の大野の原に置いている白露を無下に吹いて散り乱してくれるな、と体言止めにし、秋の初風によびかけた歌である。『万葉集』に「真葛原名引秋風毎吹阿陀乃大野之芽子花散」（巻第十　二〇九六）がある。『風土記』播磨国風土記〈飾磨郡〉に「大野里土中々　右稱大野者　本爲荒野　故號大野」[注3]とある。この「大野」であればこの歌は荒れ野の「しらつゆ」を詠んだことになる。秋の風情を楽しむ作者は、無下に「秋のはつ風」の吹くことを好まない。「な…そ」は懇願の気持を含めて禁止しているとおもわれる。

用例　四　二二七「はぎをよめる　しらすげのま野のはぎはらつゆながらおりつる袖ぞ人なとがめそ　太宰大弐長実」

白菅の真野の萩原で、露の置いたまま萩を折りとって濡れた袖だよ。人よ、あれこれ言わないでくれ。心ならずも濡れた袖である、の意。「しらすげ」は葉が白っぽいすげのこと。「ま野」は、愛知県豊橋市東部から静岡県浜名湖西町にかけての白須賀の野[注3]。「な…そ」は懇願の気持を含めた禁止の意をあらわす。

用例　五　二五三　「宇治前太政大臣、大井にまかれりけるともにまかりてよめる　おほゐがはいはなみたかしいかだしよきしのもみぢにあからめなせそ　大納言経信」

大井川の岩にあたる川波は高い。筏士よ、川岸の紅葉の美しさに目を奪われてよそ見をするなよ、の意である。水辺の美しい紅葉を詠んだ歌である。「なみ」高い大井川を下る「いかだし」に呼びかけている。「な…そ」は禁止の意を表す。

用例六　五六九「月のいるをみてよめる　にしへゆくこゝろはわれもあるものをひとりないりそ秋夜の月　源師賢朝臣」

極楽浄土のあるという西へ向かおうとするこころざしは私にもあるのに、一人で西に入ってしまうなよと秋の夜の月に呼びかけ、仏教へのこころざしを詠んだ歌。擬人化した「月」、体言止めの「秋の夜の月」に作者の感情のたかまりが感じられる。『後拾遺和歌集』に同趣の「月を見てよみ侍ける　もろともにおなじうき世にすむ月のうらやましくも西へゆくかな　中原長国妻」（巻第十五　雑一）がある。[注4]歌意は、私と同じ「うき世」に住んでいる月なのに、羨ましいことに西方へ行くのだなあであり、西方極楽浄土を思った歌である。「な…そ」は禁止の意をあらわす。

用例七　六七七「家の山吹を、人々あまたまうできてあそびける次に、をりけるをみてよめる　わが宿に又こん人もみるばかりをりなやつしそ山吹の花　中納言雅定」

山吹の美しさに惹かれて折ることを詠んだ歌である。山吹の花の美しさに惹かれて私の家に別にやってくる来る人が見るくらいに残して、折りつくしてくれるな、の意である。「な…そ」は懇願の気持を含めた禁止を表す。

用例八　八二三「寄関恋をよめる　なこそといふ事をば君が

NII-Electronic Library Service

Miyazaki Women's Junior College

宮崎女子短期大学紀要　第21号　1-13頁

『金葉和歌集』『後拾遺和歌集』の禁止表現

―「な…そ」「…な」―

田中司郎

はじめに

八代集の最初の歌集である『古今和歌集』と最後の歌集である『新古今和歌集』の禁止表現「な…そ」を昭和五十年に検討したことがある。用例をみていくと、「な…そ」「…な」のいずれにも「禁止の意をあらわすもの」「懇願の気持を含めて禁止するもの」があること、また、作者の呼びかけている対象が自然と人事にわたり、それぞれにさまざまな心情が表現されていること、さらに用例の中に、身分の上下、親子、男女等の対人関係、使用されている場等によって禁止のニュアンスにかなりの差異があることに気付いた。今回は二つの歌集に見られる「な…そ」「…な」が、文末にあって、叙述全体を相手に持ちかける終助詞の中でも、とりわけ作者・動作主の欲求があらわれる状況を検討する。

『金葉和歌集』の禁止表現

「な（副詞）・連用形・そ（終助詞）」

歌　一〇例

詞書　一例

用例一　三一[注1]「天徳四年内裏の歌合によめる　さほひめのいとそめかくるあをやぎをふきなみだりそはるの山風　平兼盛」

この歌は、「春を司る女神の佐保姫が染めて懸けている青々とした柳の糸を吹き乱してくれるな、春の山風よ」の意。春の風情を楽しもうとしている作者が、「春の山風」に吹き乱してくれるな、と懇願の気持ちを含めて、呼びかけている歌と思われる。「あをやぎ」で柳の枝を糸に喩え、「そめかく」「みだり」を「糸」の縁語に用いて、巧みに春の風情を詠みあげている。「鶯の糸に縒るてふ玉柳吹きな乱りそ春の山風」（後撰・春下・読人しらず）に拠る。[注2] 体言止めである。「はるの山風」と言い切ることにより余韻・余情が残り詠嘆の心情が表現されている。「な…そ」は懇願の気持ちを含めて禁止しているとおもわれる。

用例二　八〇　「水辺款冬をよめる　かぎりありてちるだにおしきやまぶきをいたくなおりそ井での河浪　摂政左大臣」

「いたくなおりそ」に作者の心情がよくあらわれている。「いたく」は心の痛みを感じる時によく使用される。この歌は、花の咲く

NII-Electronic Library Service